

三到図書館 ニュース

- 📖 思い出す事ども
- 📖 読書の楽しみ 図書館への誘い...
- 📖 お知らせ：外部別置と本館フロアー変更
- 📖 付録：図書館統合のお知らせ



OBIRIN UNIVERSITY LIBRARY

思い出す事ども

短期大学部学長 岡村 登志夫



図書館について何か書けということである。短期大学部は今年4月から新生の受け入れを停止した。したがって、おまえは今年が最後であるから、桜美林大学の図書館というものについて、何か思い出すことを書き残しておけというのであろう。しかし私は「三到図書館ニュース」のだいぶ以前の号で思い出を語ってしまっている。覚えていない人もいないであろうが、一部重複することをお許しいただきたい。

昭和38年頃から、第一次ベビーブームに当たる高校生の急増期に入っていく。創立者清水安三先生の悲願であった大学設立ということを具体化させる好機到来である。安三先生は、今何もせずにいると将来「門前雀羅を張る」ことになるぞとしきりに説かれた。これは「門前市をなす」の反対で衰退している状態を言った言葉である。私はその頃高等学校の教員であったが、私どもの中には、桜美林には大学を創る実力はない、創るとなれば、ただでさえ低い給料を据え置かれることになる。収入増が見込まれる今こそ給料を上げるべきだという意見もあった。しかし、清水安三、郁子両先生の熱意に押されて、私どもの間では大学を創ることに意思統一がなされていった。

大学を創るためには図書館がなければならない。そこで昭和40年に、大学設立を申請するための図書館として時習館ができた。さて、建物は出来たものの、事前の予備調査で、蔵書数が大学の設置基準の冊数に足りないことが分かった。当時の財政事情では、図書を新規に購入するだけの余裕はなかった。そこでブックラッシュを実施することになった。中学高校の生徒を通じて、御父母に手持ちの書物の寄贈を訴えたのである。毎朝のホームルームで生徒の協力を求めたことを覚えている。私ども教職員も率先して提供する必要がある。

手持ちのわずかな蔵書の中から学生向きの本を抜き出し持ち寄ったのであった。

建物が出来、書物が揃っても、それを整理しなければならない。今の若い人は見たこともないであろうが、昔は図書館での本の検索はすべてカードによって行っていた。このカード書きがなかなか厄介な仕事であった。著者による分類、書名による分類と一冊の本について複数のカードが必要である。そのカード書きも専門の業者もあったであろうが、費用も時間もいとなれば、中学高校の教職員を総動員して順番に割り当てて書かせる以外にない。人海戦術というやつである。雑然として暑苦しい部屋で、図書館員の指示に従いながら、あの小さなカードの記入に当たったのを覚えている。

昭和41年1月には、桜美林大学文学部が正式に認可され、さらに昭和45年5月には現在の三到図書館が完成した。見上げるような大きな建物で、これでもう二度と図書館を建て替える必要はなかりうと思っただけである。しかしながら、たちまちのうちに手狭になり一階二階にあった中高の図書館を分離して別の場所に移した。更に雑誌などは分館を作ってそこに移した。その上学外の倉庫も借りているということである。

こうした事態を打開するために、新図書館の建設計画が進められていると、この「ニュース」の前号で図書館長宮下幸一先生が表明されている。新図書館の建設に当たっては、かつての私たちのように勤労奉仕をする必要はない。しかし、図書館を実際に利用している学生諸君や教職員職員の皆さんが、使い勝手のよい図書館にするもっとも有力なアイデアの提供者となりうる。与えられた図書館ではなく自分たちが作り上げた図書館で勉強し研究する楽しさは私たちが実証済みである。皆さんの活躍を祈りたい。

図書館での出会い

国際教育センター 日本語教育専任助手 藤田ラウンド幸世

現在、桜美林大学には長期・短期留学生、大学院生、総数で600人近くの留学生がいます。長期留学生はアジア、特に中国から、短期留学生は毎年、中国、韓国、インド、欧米など12カ国前後から来ますので桜美林のキャンパスは既に多文化共生コミュニティが実現していると言えます。

長期留学生は4年間の大学生活を桜美林大学で送りますが大多数の留学生は学費や生活費を自分の力で稼ぎ出しています。それだけに彼・彼女たちには図書館を多面的に積極的に活用し充実した大学生活を送ってほしいと願っています。概して図書館は黙々と本を読み勉強をするというイメージが強いかもしれませんが、充実した豊かな大学生活とは自分が楽しいと思うことを発見することであり、そのために私は学生たちにむしろ図書館で様々な「人」に出会ってほしいと考えています。

私も留学生だった頃、ある「人」に出会いました。外国語としての英語を使うことに疲れ果て、図書館の地下の奥まった場所にその「人」に会うために通っていた時期があります。そこは日本の小説が密やかに置かれている棚でした。そこで明治・大正時代の小説家と出会いました。毛嫌いしていた高校時代の教科書に出てきた「人」でしたが遠い外国で出会った、古い本から立ち現れたその「人」は人生の先輩として日本語で私に語りかけ、いつでも励ましてくれました。

図書館は大学の中でも一番多くの多種多様な「人」と出会える場所ではないでしょうか。本、メディア、雑誌、データベースと形は様々であれ、その様々な形の中には必ず「人」の声が聞こえてくるはずで、本で言えば「著者」、ビデオやDVDの作品では「俳優、監督、製作者」、データベースの情報の「発信者」や「编者」たち。そのように考えると、図書館に息づく「人」の総数は気が遠くなるような数ですが、同時にそれだけ多くの「人」がいるならば、きっと私たち一人一人の気持ちをよく分かってくれる「人」も見つかりそうです。国や地域を問わず、時を問わず、民族を問わず、様々な背景を持つ「人」がいつでも扉を開けて声をかけてくれます。

キャンパス内でベンチの隣に腰掛けている多文化の、生身の人に勇気を出して話しかけることもそうですが、図書館の中でも自分の理解者となりうる多文化の「人」に話しかけてみてください。さて、どんな「人」にどの階で出会えるでしょうか。



藤田ラウンド幸世先生の著作を読みたい人は

- 1, 「家族が育むバイリンガルの母語」(渡戸一郎・川村千鶴子編著『多文化教育を拓く』明石書店 2002所収) 376.9/W45

楽しい読書、目的のない読書

国際学部国際学科 助教授 西岡達裕

楽しい読書とは、目的のない読書である。その意味で、読書を楽しむという「特権」を与えられているのは、大学の教員ではなく、学生である。正直に言えば、私の読書への情熱は、教員になってから薄れてきた。学生諸君は、教員が読書を苦にしているはずがないと信じているであろう。しかし、それは事実ではない。それには理由がある。

大学教員にとって読書がつまらないという意外な事実気づいたのは、私が就職する前、指導教授の退職記念パーティーであった。「先生は大学を退職して、これから何がしたいですか」。教え子からの質問に、私の先生はこう答えた。「目的のない読書をしたいです」。先生は、講義の準備など「仕事上の必要に迫られた読書」の労苦から解放されて、学生時代のように、純粹に自分の好奇心にもとづいて濫読したいと願っていたのである。

なるほど、世間には「目的がなければ本なんか読まない」という人も大勢いる。しかし、実は、授業や仕事上の目的のある読書こそ窮屈であり、そればかりでは息が詰まるというものである。その点、目的のない読書は楽しい。どこまでも自由に、純粹に好奇心に駆られて、古今東西の賢人や芸術家たちと本を通じて対話するのは、この上もない贅沢である。

振り返ってみると、私自身の濫読時代は大学受験に失敗して浪人していた2年間であり、その頃の読書はかけねなしにおもしろかった。予備校に通うふりをして、神田の古本屋街をうろつき、店頭でたたき売られている文庫版の名著を1冊50円で買いあさった。ゲーテ、ドストエフスキー、チャーホフ、トルストイ、シェークスピア、ヒルトン、アナートル・フランス、モーパッサン、ヘッセ、イブセン、スタインベック、ヘミングウェイ、プラトン、ニーチェ、ルソー、マルクス、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫。浪人してもなお教科書を開かず、毎日こんな本ばかり読みふけていたら、大学に受からないのも無理はない。しかし、おかげで両親には苦勞をかけたが、このときの読書によって、思想や感性や人格が生まれ、私という人間の基礎がつけられたことは疑いない。

大学入学後は、専門分野について体系的な読書ができる最後の機会であるといわれて、そのような読書に努めてきた。私も大学教員になった以上、専門的な教育のためにそういうアドバイスをするべきなのかもしれない。ただ、これまであまり本に親しんでこなかったという学生がいたら、気の向くまま古典を読み漁るのも悪くない、と伝えておきたい。



西岡先生の著作を読みたい人は

- 1, 西岡達裕著『アメリカ外交と核軍備競争の起源1942 - 46』彩流社 1999 319.8/N86/A
- 2, 西岡達裕著『図解雑学アメリカ』ナツメ社 2005 302.53/N86
- 3, 齊藤孝、西岡達裕著『学術論文の技法(新訂版)』日本エディタースクール出版部 2005 816.5/Sa25

宮崎学 とっばもの 『突破者 - 戦後史の闇を駆け抜けた50年』(上)(下)

幻冬舎アウトロー文庫 経済学部経済学科 助教授 片山博文

経済学部で経済学を勉強して、いったい何の役に立つのか。この質問には、近年の実学や資格志向の高まりの中で、経済学(部)の人氣が低落しているのではないかと、という意味が込められている。そんな疑問を抱く学生さんにぜひ一読をお勧めしたいのが、宮崎学の『突破者』である。

著者の宮崎学は、毒入りチョコレートで世間を騒がせたあの「グリコ・森永事件」の犯人「キツネ目の男」として、一躍有名になった人である。敗戦後京都のヤクザの組長の家に生まれ、中学のときからマルクス主義に傾倒、革命を志し大学では共産党のゲバルト部隊で名をはせる。学生運動に挫折したのち、故郷の京都に帰って解体業の跡を継ぎ、パブル期には地上げに奔走する。『突破者』は、そうした戦後の裏社会を生きた著者の破天荒な半生を描いた自伝である。

宮崎はこの自伝の中でさまざまなムチャをしでかすのであるが、一方でそうした自分、そして自分をとりまく社会を見据える彼の目は、不思議に醒めている。例えば彼は、自分の建設会社の資金繰りにおさまられ、荒業や悪事を繰り返しながら、マルクス『資本論』の有名な「貨幣物神」の記述に言及して次のように言うのである。「これが、金の世の中の奥にある秘密なのだ。人の役に立つものとして真面目につくったものが、商品という形をとることによって、見かけ上その真面目な労働以上の意味をもってしまふことから、金への崇拜が始まり、やがてそれは金の地獄につながっていく。」(下巻、42～43ページ)

経済学は、確かに資格のように直接何かに役立つスキルではない。その意味では、経済学は「教養」の一種であるといってもよい。しかし、『突破者』の中に出てくる経済学は、例えば立花隆流の教養主義とは、かなり位相を異にするように私には思われる。それは、苛烈に闘いながら自己実現をめざす者＝「突破者」が、世界に斬り込み、世界をわがものにするための武器なのだ。

私にとって『突破者』の魅力は、欲望を追い求める主体としての著者と、そうした自分を社会科学的に冷静に分析する分析者としての著者のダイナミックな交錯にある。かつて経済学者ミルは、経済学に必要なものは「冷静な頭脳と熱い心」(cool head and warm heart)だと言った。それは社会改良に賭ける彼の志を述べたものであったが、私は、宮崎学の『突破者』を読むたびに、ミルとは違う意味かもしれないが「冷静な頭脳と熱い心」を感じるのである。とにかく話だけでもめっばう面白いので、ぜひ読んでみて下さい!



片山先生の著作を読んでみたい人は

- 1, 「環境問題：『負の遺産』と市場経済のはざままで」(岩崎一郎等編『現代中央アジア論 一変貌する政治・経済の深層』日本評論社 2004所収) 302.296/193
- 2, 「税財政の『グリーン改革』に向けて」(寺西俊一編『新しい環境経済政策』東洋経済新報社 2003所収) 519.1/Te56

読書とは書いた人と対話すること

文学部言語コミュニケーション学科 助教授 畑山浩昭

友人や知人のホームページ上で公開されている日記やエッセイを読んでいると、書いてる本人の顔が頭に浮かんでくる。「あの人こんなことを考えているんだ」とか「こんなこと知ってるんだ」と感心しながらも、自然にその人のことを思う。素敵なコミュニケーションだ。

20年以上も前になるが、私の大学生時代は、個人が書いた文章を大衆に公開するなんて簡単にはできなかった。手段としては紙媒体しかないし、友人や知人の書いた文章が日本全国に公開されることなどは「超レア」な出来事だったのだ。だから、本や雑誌の文章を読んでも、それを書いた人の顔が思い浮かぶことなど皆無だった。だってどの本を読んでも、会ったことも見たこともない著者ばかりなんだから。

それから10年後のこと。大学院で学んでいるときに、学者としてカッコイイ先生がいたので、先生が書いた本を買ってサインをおねだりした。すると、「あなたのフルネームは？」と微笑んで、先生は本を手を取った。白紙の部分をわざわざ探して、そのページいっぱい、本を買ってくれたことに対する感謝の気持ちや、異国の地で学ぶ院生への励ましの言葉を書いてくれたのだ。サインさえ断られると思っていた私は感激し、その後、何回も何回もその本を読んだ。読むたびに先生の顔を思い浮かべ、読むたびに本の内容について先生と議論した。

本を読むのは、人と話すことに似ている。文章を通してそれを書いた人と対話すること。その本の内容について、書いた人とチャットするつもりで読むといい。小説のように作者が直接語りかけられないような文章でも、物語に感じ取られる思想や表現なんかについて、作者と語り合うことができる。どんなに有名な作家でも、権威ある学者でも、もうとっくにこの世にいない芸人でも、その人と同じテーブルの席について対話するのが読書だ。書かれていることをネタにしてね。

いろいろな文章を読むと、書いた人がそれぞれ「何かについての答えを出そうとしている」ことに気づく。作者は、あるテーマについて、その時に出したひとつの答えを文章にしているのだ。だから、読む人も自分の答えを読書に求めるといい。書いた人と話しながら、じっくりと自分の答えを出すといい。本の数だけ答えがある。図書館もそこにある。準備は整っているんだ。



畑山先生の著作を読んでみたい人は

- 1, 畑山浩昭等著『自己表現の技法 文章表現・コミュニケーション・プレゼンテーション』実教出版 2004 指定図書

お知らせ

外部別置（がいぶべっち）と本館のフロア変更について ～ 和書・大型本が移動しました ～

2006年4月より分館と本館が統合されるため、その準備として夏休み期間中に約4万冊の和書を外部倉庫に預け（外部別置）、本館和書と大型本の移動をおこないました。

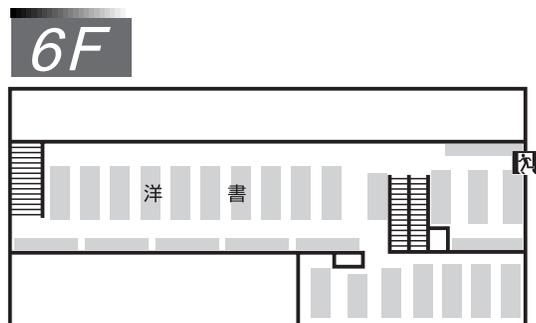
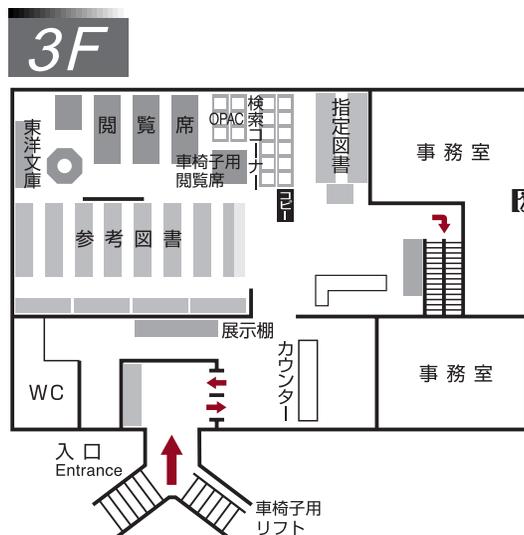
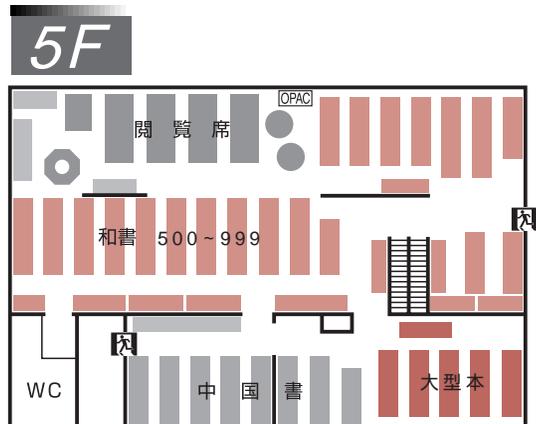
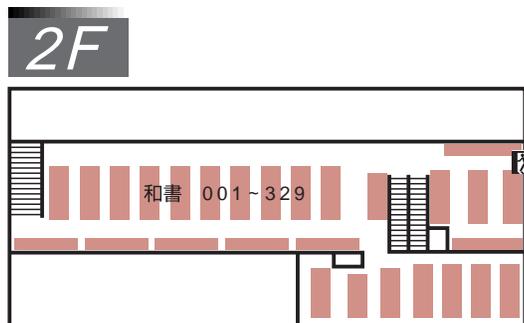
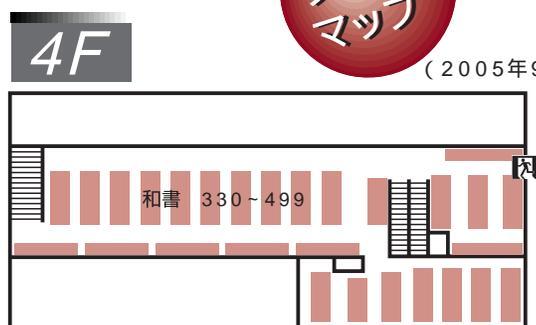
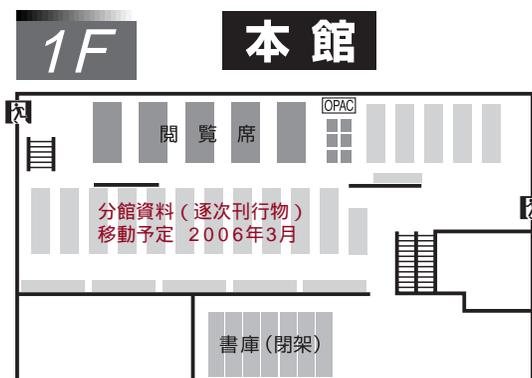
今回、外部別置した資料は1985年までに図書館に受け入れられた古い資料を中心としています。今後は、OPACの所在が「外部5」と表示され、取り寄せによる利用ができます。

そして、今まで本館1Fから5Fにあった和書を2Fから5Fに収めました。また、大型本を1Fから5Fに移動しました。現在1Fフロアの書架は空いていますが、2006年3月には分館の雑誌・新聞などをここに収めることとなります。

分館との統合にあたって、今後も多くの作業がおこなわれ、ご迷惑をおかけしますが、ご協力くださいますようお願いいたします。



(2005年9月より)



図書館統合のお知らせ

2006年4月より図書館の分館が本館に統合されることになりました。
(情報メディア室はいままでと同じです)
今回は桜美林大学図書館が現在に至るまでの変遷をたどってみました。

三到図書館小史

現在の図書館本館が建てられる以前は時習館（いまの分館の場所）に図書館がありました。現在の分館の、洋雑誌バックナンバーや各大学の紀要等がある電動書庫（スタックランナー）のあたりには、利用者が簡単には出入りできない貴重書庫があったそうです。また、時習館の落成は1965年（昭和40年）3月です。ちなみに大学の設立が文部省から認可されたのは、1966年（昭和41年）1月のことでした。



落成当時の三到図書館

1970年（昭和45年）5月に落成した本館は3層構造で、最初の頃は1階に中学・高校の図書館が同居していて、大学・短大と合わせて桜美林学園全体の図書館として利用されました。全体の床は3層、書架部分は6層、このようなスタイルが当時の図書館建築の流れで、同時期につくられた他大学の図書館でも同じような構造が見られます。

中学・高校の図書室が完成して、現在の図書館と分離したのは1983年4月のことです。この時期に本館ではあわせて改修工事を行ないました。この時点で蔵書数は約16万冊。すでに書架が足りないという問題が起きていました。国際学部が開設された1989年（平成元年）4月に現在の図書館分館が新設され、それまで本館の1、2階にあった、雑誌、新聞、年鑑・白書・統計類（逐次刊行物）を分館へ移動しました。そして、逐次刊行物の分館への移動を待って、図書を1～6階に配架し直しました。



時習館の様子



当時の雑誌フロア

本館・分館に分かれて利用者サービスを開始してから17年が過ぎました。そして現在、2006年春学期スタートを目指して、分館の本館への統合作業が進められています。統合後、現在分館にある雑誌、新聞、年鑑・白書・統計類（逐次刊行物）は本館の1階に配置されることとなります。一部の古い資料や利用頻度の低い資料を外部別置（倉庫に保管）にするとともに、外部別置からの取り寄せを、いままでの週2回から週3回（月、水、金）へと増やし、学生や教職員など利用者の利便性が不便にならないように配慮していきます。統合されることによりちょっと窮屈になりますが、今まで本館から分離して離れたところにあった雑誌、新聞等の利用が本館で済ませることができるといった利点もあります。

学園や大学の創設の頃を知る教職員が年々少なくなっていく今日では、建築当初の図書館の事情がわかりにくくなってしまっています。現在の分館の場所にあった旧図書館が本館建築で移動し、増設に際して再び旧図書館の場所が図書館分館となり、いままた本館に統合されるという経緯を振りかえると「歴史は繰り返す」という言葉に因縁を感じずにはられません。



次に図書館が移動するのは新図書館が落成するときです。学長も図書館長も新図書館に対して、まったく新しい発想で、従来の図書館にはない機能を持たせたいと考えているようです。いままでの図書館としての蔵書や利用者サービスはもちろんのこと、少なくとも情報センターとしての機能を持つものになるかもしれません。また、ゆったりくつろぎながら読書や研究のできるカフェ(?)など、利用者が学習や研究だけでなく、図書館に来るのを楽しんでくれる施設になってくれればと思います。

1989年9月から8年間、図書館分館で逐次刊行物（雑誌・新聞等）業務に従事されていた坐間礼子さん（現在は総務課長）に、当時の分館についての業務や思い出についてお話をお聞きしました。

坐間さんが図書館分館で働いていた頃のことをお聞かせください

坐間 私が図書館に異動になったのは1989年春の国際学部開設、分館新設の直後の秋からでしたので、分館新設の移転作業のことは経験していません。ただ、私が分館に来た当初は、まだ電動書庫（スタックランナー）は設置されておらず、また分館の外壁にある教務課の電動掲示板もありませんでした。今もそうですが、当時は分館にある新聞などを頻りに利用する学生がいて、そういった学生たちとは顔見知りになり、今よりももっとアットホームな雰囲気だったかもしれませんね。それから空気の入換えのために窓を開けていると、網戸がなかったので夏は蚊が多かった（笑）。それから、あれはいつ頃だったでしょうか、町田・相模原地区で、学校を狙った盗難事件が多発したことがあって、そのときにはコピー機のコインラックの現金や文献複写料金（現金）の管理にもずいぶん神経を遣いました。

いろいろなご苦労があったんですね。当時の分館のお仕事はどんな様子だったのでしょうか？

坐間 私が分館で働いていたあいだに雑誌類を収納する書架が足りなくなって、電動書庫を追加したり、通路の間に書架を増設したり、製本雑誌の外部別置作業（第1回目）をしたりと、いろいろな変化がありました。1992年に大学院が開設され、洋雑誌・洋新聞等の検索のCD-ROMが入ってくるようになり、利用と保管のための場所も用意しました。図書館の利用ガイダンスも、当時は本館のガイダンスが主だったんですが、分館に「朝日新聞」「Japan Times」「Washington Post」「The Guardian」などの新聞記事の検索用のCD-ROMが入ってきてからは、先生方が以前にも増して積極的に利用するようになり、分館のガイダンスの実施回数も増えていきました。

当時は大学院が開設されて、院生や先生方からの文献取寄せの依頼が増えてきた時期でした。その当時は、オンラインで依頼できるような図書館システムはまだ整備されていなかったため、1件ごとに複写式の申込み用紙に手書きで記入して、依頼先の大学に郵送していました。1件1件の処理にほとんど手間がかかりましたね。あるひとつの雑誌の所蔵館を調べるのにも、まだオンラインの総合目録（現在のNACSIS Webcatのような所蔵検索ツール）がなかったため、冊子体の「学術雑誌総合目録」で丹念に調べました。あんなに使用した参考資料は他になかったかな（笑）「学術雑誌総合目録」がオンライン化されたのは1995～1996年頃で、それ以前は、数年に1回の所蔵調査（各図書館が所蔵している雑誌類の報告）も紙ベースでおこなっていたんですよ。この手作業がとてもたいへんでした。その後オンラインで所蔵登録ができるようになって、その移行過程も経験できましたね。

逐次刊行物は常に新しいものが発行されるので、仕事が途切れることがありません。たいへんだったけれど、雑誌、新聞、紀要等の受入は、カードに記録するアナログな作業から、コンピュータを使ってデータベースに入力するというデジタルな作業を経験できたことは、その後の業務にたいへん役に立ったと思います。（桜美林大学の）図書館分館では、資料の受入から配架、カウンターでの貸出返却、レファレンス業務等、ひとつおりの図書館業務の流れを経験できたのも良かったと思います（注：規模の大きな大学図書館では、例えば、受入業務担当の人は、受入の仕事がメインで、カウンター業務等を経験することはほとんどありません）。また、寄贈された資料をどう扱うか、たとえば図書館で受け入れて蔵書とするか否か、という資料の価値判断や、どこに配架するか、年鑑・白書類を、逐次刊行物扱いにするか、単行書扱いとするかなどの判断は難しかったですね。いまでも図書館では判断が揺れて悩んでいることもあるんじゃないですか（笑）雑誌は継続して発行されるので、こまぎれにある年度の号だけ購入しても、継続性という点からは資料としての価値が低くなってしまいます。いったん購入し始めたら中止するということが難しく、予算との兼ね合いを考慮しながら、どの雑誌を新規に購入するか、どれを中止するか、どれを製本すればいいかということにも頭を悩ませました。

当時から逐次刊行物業務はコツコツと丹念におこなわれていたんですね。それでは最後に図書館の統合について感想をお願いします。

坐間 いままで本館と分館に分かれていた図書館が一本化されるのは、利用者にしてみれば良いことだと思います。ただ雑誌、新聞等が本館の1階に配架されるのであれば、1階にも受付カウンターを設置したり、利用者の資料検索の指導や相談に対応できる図書館職員を配置できると思います。逐次刊行物のレファレンスはちょっと特殊なところがあって、慣れていない利用者にとっては難しい部分が多いんですよ。そういうときにすぐに図書館職員に尋ねることができる環境が必要だと思います。大学図書館は、大学のなかでは最も重要なサービス機関のひとつですから、さまざまな利用者サービスにもっと力を注いでもらいたいですね。図書館分館は本館から離れていて、また逐次刊行物業務も図書とはまた違う業務だったので、本館で働いている図書館職員たちからは、いまひとつ業務の内容が見えにくかったんじゃないでしょうか。いまもそうでしょうけれど、昼休みは交替でカウンター当番をしていたんですが、いつも本館にいる職員が分館のカウンターに座ると緊張していましたね。慣れていないせいもあったんでしょうが、難しいことを聞かれたらどうしよう、、、なんて（笑）

学生や先生方の利用は増えてきていると思いますが、せっかくこれだけの蔵書やデータベースを備えた図書館があるのだから、職員のみなさんにももっと利用してもらおうといいですね。図書館には新聞記事や雑誌記事検索のオンラインデータベースがあって、学内のネットワークにつながったパソコンであればどこからでも利用できるため、職員の皆さんの業務だけでなく日常生活の情報収集にも役立つんじゃないでしょうか。現在は情報が氾濫していて、オンライン検索等で情報を手に入れるのは簡単になってきたけれど、ほんとうに必要な情報や資料に、いかにしてたどりつくかという道筋を教えることは図書館職員の重要な仕事だと思います。特に学生に対しては、目先の課題や小論文、ゼミ発表等のための資料を探すということだけでなく、社会に出てから、仕事などで必要な資料を手に入れるという際にも、図書館で情報検索の技術を学んだことが後々も役に立つのですから、そうやってくれたらとても嬉しいです。

今日はいろいろと興味深いお話を聞かせていただきありがとうございます。

坐間 図書館の皆さんの活躍にこれからも期待していますよ。

図書館では、図書館利用、資料検索のお手伝い、データベースの利用等に関するガイダンスを受け付けています。必要な方は遠慮なくお気軽にご相談下さい。